

AJIBI News

vol.

95

あじびニュース

アジア美術の
未来につながる場所



福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

遊び方いろいろ

だれでも楽しめる

ボランティアによる コレクションガイド

ボランティアと対話しながらアジアギャラリーの作品を鑑賞します。アジア美術の多彩な表現の面白さや制作の意図・社会的背景などについて理解を深めることができます。

日時：毎日13:00～15:00、
展示室にいるボランティアが対応
会場：アジアギャラリー（7階）

学芸スタッフによる 多言語ギャラリーツアー

学芸スタッフが「ベストコレクションII」展を日本語・英語・中国語・韓国語で解説します。

「英語ツアー」12.8[日]、3.23[日]
「中国語ツアー」2.1[土]
「韓国語ツアー」2.23[日]
各日14:00-14:45

「日本語ツアー」1.26[日]、2.22[土]、3.8[土]、3.9[日]
各日13:30-14:00、15:00-15:30
会場：アジアギャラリー（7階）



ベテランのボランティアさんの中には「この作品の作者に直接会ったことがある」という人も。運がよければ、スター作家の若き日のエピソードが聴けるかも？

多彩なバックグラウンドの方々に楽しんでいただくための新たな試みです。今後、ベトナム語やベンガル語なども展開するかも??

「福岡アジア美術館」の魅力と 学芸員によるおすすめ

絵本でアジアを旅しよう

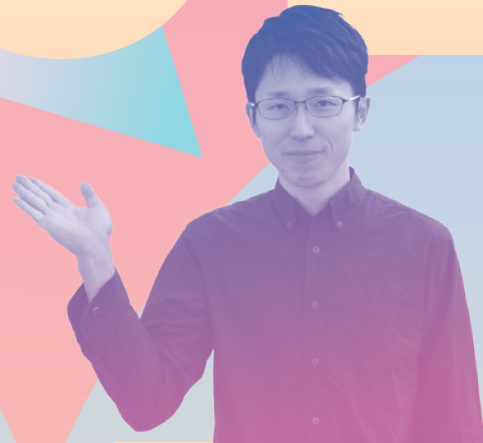
アジアの言語と日本語で展開する、アジア各地の絵本や紙芝居の読み聞かせです。アジアの絵本を、絵と音でお楽しみください。

各日11:30～12:00、13:00～13:30
（開催3日前までに下記QRコードより要予約）
「インドの絵本の日」12.8[日]
「モンゴルの絵本の日」2025. 2.9[日]
会場：キッズコーナー（7階）



来年2月に紹介するモンゴルの絵本は『ゴナンとかいぶつ』。力持ちの少年ゴナンが、山のように大きな怪物マンガスと三日三晩の相撲をとるお話です！

※日本語のみの読み聞かせは、毎月第2・第4の火・日曜に実施



学芸員
佐々木玄太郎

福岡アジア美術館では、幅広い方々に当館を活用いただくために各所で多彩な試みを展開中。それぞれの特徴をご紹介します。ご近所の方も遠方の方も、ぜひあじびを使い倒してください！

バーチャルミュージアム

時間や空間の制約を超えて利用できる「バーチャルミュージアム」が今年からオープン。これは、当館コレクション展の展示空間を3Dカメラで撮影し、その記録をホームページ上で公開するものです。利用者は、オンラインのバーチャル空間の中でいつでもこれらの展覧会を鑑賞することができます。

開館25周年企画の「ベストコレクション」展も「アジアン・ポップ」展も、解説つきで惜しみなくすべてアップしています！



どこでも見られる

もっと わかる

オンライン蔵書検索システム

福岡アジア美術館内には、アジアの近現代美術に関する専門図書室があります。ここに所蔵されている約6万冊の蔵書は、オンラインで検索可能です。



内外の研究者がひそかに活用していると噂の便利システム。



アジア美術資料室



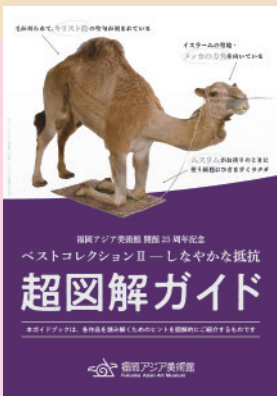
福岡アジア美術館が蓄積してきた記録・情報・ネットワークを生かして制作・運営している、近代化以後現代までのアジア美術の理解を深めるための手引きとなる学び（ラーニング）の場。アジア近代・現代美術の特有の歴史を理解するための「基本用語」を集めた[知る]ページと、「年表」と「文献」のデータベースの[調べる]ページで現在は構成されています。

昨年オープンしてから、実は着々と掲載情報を追加中。現在は重要作家紹介をアップ準備中！

学芸スタッフ紹介

福岡アジア美術館の学芸スタッフと、それぞれの専門・関心をオンライン上でご紹介しています。

展覧会やレジデンスに関わるスタッフの魅力も多彩！あじびの舞台裏もお楽しみください。



超図解ガイド

「ベストコレクションII」展の入場者に無料配布しているリーフレット。各作品を読み解くためのヒントを図解的に紹介。アジアの美術作品の背景となっている各地の歴史や社会状況から宗教的シンボルの意味、作者の個人的な経験まで、情報盛りだくさんです。

いつでも 学べる

複雑な作品を前に「ワケがわからなくなってきた…」と頭を抱えた学芸員K。情報を整理しようと、作品のイラストにあれこれ関連情報を書き込み始めました。それを見た学芸員Sが「これは使える」と思って設計したのがこのガイドブックです。



Artist in Residence

2024 2nd Period

OVERSEAS

Bruno Ruiz

ブルーノ・ルイス

[1990年生まれ、メキシコシティ在住]

滞在期間

2024.10.5～12.25



ルイスは、メキシコで「Red de Reproducción y Distribución(再生産と流通のネットワーク)」(通称:RRD)というコレクティブ活動を行い、自費出版や道路で小品を販売するキオスクなどを美術表現に取り込み、公共の場における美術の自立性とは何かを問う活動を行ってきました。福岡では、日本におけるガリ版の歴史や役割などに注目しリサーチを重ね、印刷物を愛する福岡の人々と協働しながら、ガリ版を用いた新作を制作します。



「後藤ガリ版印刷所」訪問

POINT!

久留米市の「後藤ガリ版印刷所」や福岡市で活動するガリ版コレクティブ「ガリ番地」と共にガリ版制作を体験。日本のガリ版の技法をリサーチし、滞在中に自作するガリ版印刷機で作品を生み出します。

福岡アジア美術館は、アジアをはじめ国内外で活躍するアーティストを招へいし、滞在制作や展覧会、ワークショップ、トークなどを通して、さまざまな美術交流を行っています。2024年度の滞在制作・第2期は10月より開始。第1期から制作を行う2名に、新しく3名のアーティストが加わり活動しています。

JAPAN

Sugihara Nobuyuki

× Nakamura Ayaka

杉原信幸

× 中村綾花

杉原信幸[1980年生まれ、長野県在住]

中村綾花[1982年生まれ、長野県在住]

滞在期間

2024.10.8～12.25



イチゴ農家を経て帽子作家になった中村綾花と美術家の杉原信幸のユニットです。二人は土地の記憶の欠片を繋ぎ合わせることで、土地に宿っている形を造形化し、その創作行為から生まれる即興の舞による儀式を行います。土地の文化を受け継ぎ、生活とアートが分けられる以前の豊かな精神性と身体性を蘇らせます。



豊前神楽の大村神楽講

POINT!

これまで、台湾・インドネシア・マレーシアなどの先住民を調査。福岡では志賀島で安曇族の祖である安曇磯良を研究します。貝殻の船や面を作り、最後にパフォーマンスをする予定。

JAPAN / FUKUOKA 浦川大志[1994年生まれ、福岡在住] 滞在期間:2024.7.1-12.25 上村卓大[1980年生まれ、福岡在住] 滞在期間:2024.7.1-12.25

AJIBI Discuss

あじびのこと話そう

#02

アーティスト・イン・レジデンス

ザワザワ感こそ醍醐味！
あじび学芸員が見つめる
レジデンスの今と未来。



キュレーターの傲慢さが通用しない

1期の成果展が終わり、2期がスタートした今年度の「アーティスト・イン・レジデンス」。担当の中尾さんと趙さんはどう感じているのか。

中尾(以下 中) 1期は人数が多く、滞在期間が2期にかかる作家もいて、今までにないレジデンスでした。趙さんは今年度から初めて担当になりましたが、どうでしたか？

趙 とても有機的で……エネルギーに満ちた日々を過ごさせていただきました。

中 言葉を選んでいる感じだね(笑)。

趙 (笑)。作品という“もの”を扱う収集・展示係と違い、交流・教育係は“ひと”と向き合うので、キュレーターとして即座に答えを求められる場面が多々ありました。打ち返すには瞬発的な批評的思考が必要で、苦しくもあり、楽しくもありました。

中 作家のペースに合わせて仕事をする分、予想外のことが起こりやすいですね。

趙 キュレーターは自分の考えたコンセプトに作品を位置づけて展覧会という文脈をつくりますが、それってすごく傲慢なことでもある。その傲慢さがレジデンスでは通用しない。嫌な言い方をすると、コントロールできないんですよね。

Art Work Shop Report

11月に行われた、レジデンスの作家と
福岡の子どもたちによるワークショップ・レポート

ブルーノ・ルイスによる ガリ版でつくる“ガリガリ”

日時:11.5 [火]10:00～12:00 会場:福岡アジア美術館 交流スタジオ
参加者:小学1～6年生57名



ブルーノ・ルイスさんと名島小学校の子どもたちが、ガリ版づくりのワークショップを行いました。子どもたちはガリ版を刷る時に聞こえる「ガリガリ」という音から思い浮かべるイメージをもとにして、事前に版を制作。この日はその版を実際にブルーノさんと一緒に刷って、作品制作の過程を体験しました。さらに、「ガリガリ」の音のイメージを思い思いに描いた冊子づくりも行い、楽しい時間を過ごしました。

上村卓大による アーティストとつくる秘密基地★

日時:11.7 [木]9:40～11:00 会場:福岡アジア美術館 交流スタジオ
参加者:小学1～6年生18名



上村卓大さんと田島小学校の子どもたちが、交流スタジオにあるものを用いて秘密基地をつくりました。テーブルヤイス、プラスチックダンボール、ラジカセやザル、洗濯ばさみやクリップなどさまざまなものを組み合わせて、自分だけの空間をしつらえました。そこに自分の分身である人形「すきまちゃん」を置いて、基地は完成。最後はみんなで原状復帰し、スタジオはもとの空間に戻りました。上村さんとの創作体験は子どもたちの心にずっと残ることでしょう。

あじびは内向きであってはいけない

中 2期含め、趙さんはこれからのレジデンスにどんな可能性を感じますか？

趙 う～ん、可能性しかないですね！

中 いい言葉！

趙 私としては「数十年後もまた一緒に仕事しようぜ」という気持ちで作家たちと関わっているので、それが実現したらいいですね。ともに成長できたら。

中 レジデンスで来てくれたルー・ヤンも世界に羽ばたいた作家の一人だけど、11月にはあじびでトークイベントを行うなど、継続して深いつながりが持てているのは嬉しいことですね。

趙 2期は日本以外のアジア圏の作家がいないのも面白い点。アジアってそもそも何なのか、地域で区切ることによってどんな意味があるのかについて、考えるきっかけにもなるんじゃないかなと思います。

中 ほかに僕がレジデンスならではだと思っているのは、ザワザワ感なんです。アーティストがいるからこそ生み出される何か起きそうな雰囲気やざわめき。予定調和とは反対の、そうしたザワザワ感が、美術館の新しい可能性をひらいてくれる気がするんです。展覧会で作品を観るのももちろん楽しいけど、やっぱりレジデンスがないとあじびじゃない。

趙 アジア美術の注目度が低かった90年代からいち早くレジデンスを取り入れ、作品を生み出す“ひと”も大切にしてきたあじびの姿勢こそがレジデンスに現れていると思います。2022年度からACFが拠点となり、心強いコーディネーターチームがついてくれたことで、オープンかつスムーズな運営になったのもいい変化だと思います。

中 ささまざまなバックグラウンドをもった人が集まって、いい意味でザワザワ感が増した。やっぱりあじびは内向きであってはいけないんです。つねに福岡や日本の外側とつながっているような場所であってほしいんですよね。



中尾智路
(福岡アジア美術館学芸課交流・教育係長)
1998年より勤務。展示係と交流係を行ったり来たりしながら、展覧会企画やレジデンス事業を担当。

趙純恵
(福岡アジア美術館学芸員)
2016年より勤務。2016～2024年まで収集・展示係に勤務し、今年から交流・教育係に異動。

レジデンスは始まりの場所

趙 私は、美術作品のことを七色に輝く「宝石」だと思う時があります。レジデンスの作品も同様で、アーティストたちが懸命に宝石を磨く姿を通して、色んな感情や言葉を共有することができる。そんなレジデンスって美術の始まる場だかなと思います。

中 なじみのない場所で作品をつくるのに、レジデンスの期間は正直短い。ひとまず成果発表はするけど、ここで終わってほしくないですね。福岡で制作した作品を深掘りしたものが数年後に展示されて、「出発点はあじびです」なんて言われたら鳥肌が立つと思うな。

趙 素晴らしい作品が生まれる予兆さえあればいいんですよ。



ACFという拠点でアーティストが刺激し合う

趙 私はArtist Cafe Fukuoka (ACF) という拠点を作家たちがどう使うのかに興味がありました。実際に見てみると、独特の距離感で互いに影響し合って、増殖していくような印象を受けました。その増殖をどうサポートするか考えるのは面白かったですね。

中 方向性の素材を提供するのは僕たちの役目でもありますよね。作家が主体だけど、自由につくるだけじゃ本人も面白くないんじゃないかと僕は思う。

趙 私たちキュレーターの働きかけだけでなく、福岡にいる人や土地と関わることで生まれるアイデアもありますしね。

中 レジデンスの意味はそこにもあると思っていて、自分のテリトリーから一歩外に出るのは、ある種居心地の悪いこと。いいことばかりじゃないけど、だからこそ作家にとって想定外の刺激があるし、自分が元いた場所を客観的に捉えることもできる。

趙 今回は福岡在住の浦川大志さんと上村卓大さんが1期に続いて2期も参加するので、より多くの作家と出会える設計になっているのも面白い点ですね。

中 もっと言うと、彼らが外から来た人と福岡という場所のつなぎ役になってくれたら、もっと面白い何かが生まれるんじゃないかなと思います。

EXHIBITION

2024年12月～2025年4月の
展覧会スケジュール

DEC.2024-APR.2025

01 Fukuoka Asian Art Museum 25th Anniversary Best Collection II : Echoes of Resilience

福岡アジア美術館開館25周年記念
ベストコレクションⅡ
——しなやかな抵抗

9.14 [土]～2025.4.8 [火]

会場: アジアギャラリー

約5,000点の当館所蔵作品から、アジア現代アートの傑作を厳選してご紹介する「ベストコレクション」展の第2弾。既存の社会規範や美術の在り方などに対し、鋭い批判精神を貫き、しなやかに抵抗してきた、アジア美術のスターアーティスト8名による作品をご紹介します。



ホアン・ヨンビン [中国/フランス]《駱駝》2012年

04 Room for FAAM Residence Program Part II: Artists in Myanmar Today —Aung Ko

あじびレジデンスの部屋2期

ミャンマーの美術作家たち
はいま—アウンコー

9.14 [土]～12.17 [火]

会場: アジアギャラリー

10年余の民政期を経て、2021年のクーデターに揺れるミャンマー。自分の幼年時代や故郷をテーマに制作するアウンコーの作品と2009年の福岡滞在中の人々との交流の記録ほか、クーデター後のフランスに逃れてからの活動もあわせて紹介します。



《アウンコーの村》2010～11年

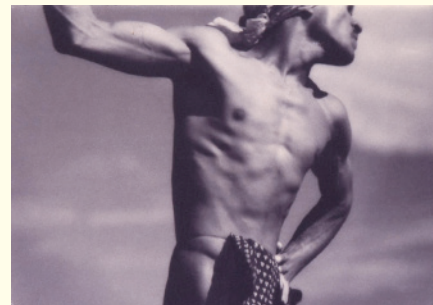
02 Asian Photo History

アジアン・フォト・ヒストリー

10.31 [木]～12.17 [火]

会場: アジアギャラリー

19世紀後半に西洋向けに輸出されたスタジオ写真から、戦後の前衛写真、さらには美術作品を前提に多様な手法で撮影された現代写真まで、アジアで撮影された写真の約150年の歴史を所蔵作品で振り返ります。



ライオネル・ウェント [スリランカ]《シンハラ人漁師のトルソ》
1936-37年頃

05 Room for FAAM Residence Program Part III: Reflection of the City

あじびレジデンスの部屋3期

都市を映す

12.19 [木]～2025.4.8 [火]

会場: アジアギャラリー

大きな変化を続ける天神の街。これまで福岡で滞在制作してきた美術作家たちは、その時々都市におけるモノや人の動き、建築を映しとってきました。今や世界的に活躍するムン・キョンウォン(韓国)や、世界各地のレジデンスに参加するジョリーン・モク(香港)らが福岡で制作した作品をとおして、都市の変遷をたどります。



チュンリン・ジョリーン・モク [香港]《店を見る》2015年

03 60th anniversary of the Normalization of Diplomatic Relations between Japan and South Korea: Realities in Korean Art

日韓国交正常化60周年記念
韓国美術のリアリティ

12.19 [木]～2025.4.8 [火]

会場: アジアギャラリー

韓国初の実験映画を制作したキム・グリムから、欧米の美術動向から独自の抽象絵画を發展させたキム・ファンギ、民主化運動のなか奔走したホン・ソングムまで、韓国現代史を振り返りながら、韓国美術の魅力をご紹介します。



キム・グリム [韓国]《1/24秒の意味》1969年/1984年

06 Fukuoka Asian Art Museum WINDS OF ARTIST IN RESIDENCE 2024 Arising from the Margins

福岡アジア美術館第23回
アーティスト・イン・レジデンスの成果展

周縁からはじまる

12.14 [土]～12.22 [日]

会場: Artist Cafe Fukuoka (中央区城内2-5)

スタジオ、ギャラリー、グランド・スタジオほか

開館時間: 11:00～17:00

休館: 12.16 [月] ※入場無料

アーティスト・イン・レジデンス事業で滞在している4組のアーティストの、成果を発表する展覧会を開催します。



ブルーノ・ルイス「SAMレジデンス成果展」2024年
シンガポール美術館 撮影: Bruno Ruiz
※参考作品

 福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

<https://faam.city.fukuoka.lg.jp>

あじびニュースvol.95 2024年12月1日発行

企画・編集・発行: 福岡アジア美術館 編集・執筆: 後藤麻与、片桐絵都

デザイン: 吉田朋史 [9P] 印刷: 株式会社四ヶ所

〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1リバラインセンタービル7・8階 TEL 092-263-1100
7.8F, Riverain Center Bldg., 3-1 Shimokawabata-machi, Hakata-ku, Fukuoka, Japan

ギャラリー観覧時間 9:30-18:00 (金曜・土曜は20:00まで) ※ギャラリー入室は閉室30分前まで
開館時間 9:30-19:30 (金曜・土曜は20:00まで) あじびホール、アートカフェ等
休館日 毎週水曜日 (水曜が休日の場合はその翌平日)
年末・年始 (12.26-1.1)

※展覧会タイトル、会期は変更することがあります

EXHIBITION

2024年12月～2025年4月の
展覧会スケジュール

01 Fukuoka Asian Art Museum 25th Anniversary
Best Collection II : Echoes of Resilience
福岡アジア美術館開館25周年記念
ベストコレクションⅡ
——しなやかな抵抗
9.14 [土]～2025.4.8 [火]
会場:アジアギャラリー
19世紀後半に西洋向けに輸出されたスタジオ写真から、戦後の前衛写真、さらには美術作品を前提に多様な手法で撮影された現代写真まで、アジアで撮影された写真の約150年の歴史を所蔵作品で振り返ります。鋭い批判精神を貫き、しなやかに抵抗してきた、アジア美術のスターアーティスト8名による作品をご紹介します。



ホアン・ヨンビン [中国/フランス]《駱駝》2012年

04 Room for FAAM Residence Program
Part II: Artists in Myanmar Today
—Aung Ko
あじびレジデンスの部屋2期
ミャンマーの美術作家たちはいま—アウンコー
9.14 [土]～12.17 [火]
会場:アジアギャラリー
10年余の民政期を経て、2021年のクーデターに揺れるミャンマー。自分の幼年時代や故郷をテーマに制作するアウンコーの作品と2009年の福岡滞在中の人々との交流の記録ほか、クーデター後のフランスに逃れてからの活動もあわせて紹介します。



《アウンコーの村》2010～11年

福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum
https://faam.city.fukuoka.lg.jp
あじびニュースvol.95 2024年12月1日発行
企画・編集・発行:福岡アジア美術館 編集・執筆:後藤麻与、片桐絵都
デザイン:吉田朋史 [9P] 印刷:株式会社四ツ角



キム・グリム [韓国]《1/24秒の意味》1969年/1984年
1936-37年頃

05 Room for FAAM Residence Program
Part III: Reflection of the City
あじびレジデンスの部屋3期
都市を映す
12.19 [木]～2025.4.8 [火]
会場:アジアギャラリー
大きな変化を続ける天神の街。これまで福岡で滞在制作してきた美術作家たちは、その時々都市におけるモノや人の動き、建築を映しとってきました。今や世界的に活躍するムン・キョンウォン(韓国)や、世界各地のレジデンスに参加するジョリーン・モク(香港)らが福岡で制作した作品をとおして、都市の変遷をたどります。



チュンリン・ジョリーン・モク [香港]《店を見る》2015年

〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1バレインセンタービル7・8階 TEL 092-263-1100
7.8F, Riverain Center Bldg., 3-1 Shimokawabata-machi, Hakata-ku, Fukuoka, Japan
ギャラリー観覧時間 9:30-18:00(金曜・土曜は20:00まで) ※ギャラリー入室は開室30分前まで
開館時間 9:30-19:30(金曜・土曜は20:00まで) あじびホール・アートカフェ等
休館日 毎週水曜日(水曜が休日の場合はその翌平日)
年末・年始(12.26-1.1)

DEC.2024-APR.2025

HOW TO ENJOY

遊び方いろいろ

だれでも楽しめる

ボランティアによる
コレクションガイド
ボランティアと対話しながらアジアギャラリーの作品を鑑賞します。アジア美術の多彩な表現の面白さや制作の意図・社会的背景などについて理解を深めることができます。
日時:毎日13:00～15:00、
展示室にいるボランティアが対応
会場:アジアギャラリー(7階)



ベテランのボランティアさんの中には「この作品の作者に直接会ったことがある」という人も。運がよければ、スター作家の若き日のエピソードが聴けるかも?

学芸スタッフによる
多言語ギャラリーツアー
学芸スタッフが「ベストコレクションⅡ」展を日本語・英語・中国語・韓国語で解説します。
「英語ツアー」12.8 [日]、3.23 [日]
「中国語ツアー」2.1 [土]
「韓国語ツアー」2.23 [日]
各日14:00-14:45
「日本語ツアー」1.26 [日]、2.22 [土]、3.8 [土]、3.9 [日]
各日13:30-14:00、15:00-15:30
会場:アジアギャラリー(7階)
多彩なバックグラウンドの方々に楽しんでいただくための新たな試みです。今後、ベトナム語やベンガル語なども展開するかも??



超図解ガイド
「ベストコレクションⅡ」展の入場者に無料配布しているリーフレット。各作品を読み解くためのヒントを図解的に紹介。アジアの美術作品の背景となっている各地の歴史や社会状況から宗教的シンボルの意味、作者の個人的な経験まで、情報盛りだくさんです。

「福岡アジア美術館」の魅力と
学芸員によるおすすめ

絵本でアジアを旅しよう

アジアの言語と日本語で展開する、アジア各地の絵本や紙芝居の読み聞かせです。アジアの絵本を、絵と音でお楽しみください。

各日11:30～12:00、13:00～13:30
(開催3日前までに下記QRコードより要予約)
「インドの絵本の日」12.8 [日]
「モンゴルの絵本の日」2025. 2.9 [日]
会場:キッズコーナー(7階)



来年2月に紹介するモンゴルの絵本は『ゴナンとかいぶつ』。力持ちの少年ゴナンが、山のように大きな怪物マンガスと三日三晩の相撲をとるお話です!
※日本語のみの読み聞かせは、毎月第2・第4の火・日曜に実施



学芸員
佐々木玄太郎

バーチャルミュージアム
時間や空間の制約を超えて利用できる「バーチャルミュージアム」が今年からオープン。これは、当館コレクション展の展示空間を3Dカメラで撮影し、その記録をホームページ上で公開するものです。利用者は、オンラインのバーチャル空間の中でいつでもこれらの展覧会を鑑賞することができます。



開館25周年企画の「ベストコレクション」展も「アジア・ポップ」展も、解説つきで惜しみなくすべてアップしています!

どこでも見られる

もっとわかる

オンライン蔵書検索システム

福岡アジア美術館内には、アジアの近現代美術に関する専門図書室があります。ここに所蔵されている約6万冊の蔵書は、オンラインで検索可能です。



アジア美術資料室

福岡アジア美術館が蓄積してきた記録・情報・ネットワークを生かして制作・運営している。近代化以後現代までのアジア美術の理解を深めるための手引きとなる学び(ラーニング)の場。アジア近代・現代美術の特有の歴史を理解するための「基本用語」を集めた[知る]ページと、「年表」と「文献」のデータベースの[調べる]ページで現在は構成されています。

昨年オープンしてから、実は着々と掲載情報を追加中。現在は重要作家紹介をアップ準備中!

学芸スタッフ紹介

福岡アジア美術館の学芸スタッフと、それぞれの専門・関心をオンライン上でご紹介しています。

展覧会やレジデンスに関わるスタッフの魅力も多彩!あじびの舞台裏もお楽しみください。

AJIBI News vol. 95

アジア美術の
未来につながる場所



あじびニュース

Artist in Residence 2024 2nd Period

OVERSEAS

Bruno Ruiz
ブルーノ・ルイス
[1990年生まれ、メキシコシティ在住]

滞在期間
2024.10.5～12.25



ルイスは、メキシコで「Red de Reproducción y Distribución (再生産と流通のネットワーク)」(通称:RRD)というコレクティブ活動を行い、自費出版や道路で小品を販売するキオスクなどを美術表現に取り込み、公共の場における美術の自立性とは何かを問う活動を行ってきました。福岡では、日本におけるガリ版の歴史や役割などに注目しリサーチを重ね、印刷物を愛する福岡の人々と協働しながら、ガリ版を用いた新作を制作します。

JAPAN / FUKUOKA 浦川大志 [1994年生まれ、福岡在住] 滞在期間:2024.7.1-12.25 上村卓大 [1980年生まれ、福岡在住] 滞在期間:2024.7.1-12.25

福岡アジア美術館は、アジアをはじめ国内外で活躍するアーティストを招へいし、滞在制作や展覧会、ワークショップ、トークなどを通して、さまざまな美術交流を行っています。2024年度の滞在制作・第2期は10月より開始。第1期から制作を行う2名に、新しく3名のアーティストが加わり活動しています。

JAPAN

Sugihara Nobuyuki
× Nakamura Ayaka
杉原信幸
× **中村綾花**

杉原信幸 [1980年生まれ、長野県在住]
中村綾花 [1982年生まれ、長野県在住]

滞在期間
2024.10.8～12.25



イチゴ農家を経て帽子作家になった中村綾花と美術家の杉原信幸のユニットです。二人は土地の記憶の欠片を繋ぎ合わせることで、土地に宿っている形を造形化し、その創作行為から生まれる即興の舞による儀式を行います。土地の文化を受け継ぎ、生活とアートが分けられる以前の豊かな精神性と身体性を蘇らせます。

POINT!
これまで、台湾・インドネシア・マレーシアなどの先住民を調査。福岡では志賀島で安曇族の祖である安曇磯良を研究します。貝殻の船や面を作り、最後にパフォーマンスをする予定。

AJIBI Discuss あじびのこと話そう

#02 アーティスト・イン・レジデンス

あじび学芸員が見つめる
レジデンスの今と未来。



キュレーターの傲慢さが通用しない

1期の成果展が終わり、2期がスタートした今年度の「アーティスト・イン・レジデンス」。担当の中尾さんと趙さんはどう感じているのか。
中尾(以下 中) 1期は人数が多く、滞在期間が2期にかかる作家もいて、今までにないレジデンスでした。趙さんは今年度から初めて担当になりましたが、どうでしたか?
趙 とても有機的で……エネルギーに満ちた日々を過ごさせていただきました。
中 言葉を選んでいる感じだね(笑)。

趙 (笑)。作品という“もの”を扱う収集・展示係と違い、交流・教育係は“ひと”と向き合うので、キュレーターとして即座に答えを求められる場面が多々ありました。打ち返すには瞬発的な批評的思考が必要で、苦しくもあり、楽しくもありました。
中 作家のペースに合わせて仕事をする分、予想外のことが起こりやすいですね。
趙 キュレーターは自分の考えたコンセプトに作品を位置づけて展覧会という文脈をつくりますが、それってすごく傲慢なことでもある。その傲慢さがレジデンスでは通用しない。嫌な言い方をすると、コントロールできないんですよ。



趙純恵
(福岡アジア美術館学芸員)
2016年より勤務。2016～2024年まで収集・展示係に勤務し、今年から交流・教育係に異動。

レジデンスは始まりの場所

趙 私は、美術作品のことを七色に輝く「宝石」だと思う時があります。レジデンスの作品も同様で、アーティストたちが懸命に宝石を磨く姿を通して、色んな感情や言葉を共有することができる。そんなレジデンスって美術の始まる場だと思っています。
中 なじみのない場所で作品をつくるのに、レジデンスの期間は正直短い。ひとまず成果発表はするけど、ここで終わってほしくないですね。福岡で制作した作品を深掘りしたものが数年後に展示されて、「出発点はあじびです」なんて言われたら鳥肌が立つと思うな。
趙 素晴らしい作品が生まれる予兆さえあればいいんですよ。



中尾智路
(福岡アジア美術館学芸員)
1998年より勤務。展示係と交流係を行ったり来たりしながら、展覧会企画やレジデンス事業を担当。



ACFという拠点でアーティストが刺激し合う

趙 私はArtist Cafe Fukuoka (ACF)という拠点を作家たちがどう使うのかに興味がありました。実際に見てみると、独特の距離感で互いに影響し合って、増殖していくような印象を受けました。その増殖をどうサポートするか考えるのは面白かったです。
中 方向性の素材を提供するのは僕たちの役目でもありますよね。作家が主体だけど、自由につくだけじゃ本人も面白くないんじゃないかと僕は思う。
趙 私たちキュレーターの働きかけだけでなく、福岡にいる人や土地と関わることで生まれるアイデアもありますね。
中 レジデンスの意味はそこにもあると思っていて、自分のテリトリーから一歩外に出るのは、ある種居心地の悪いこと。いいことばかりじゃないけど、だからこそ作家にとって想定外の刺激があるし、自分が元いた場所を客観的に捉えることもできる。
趙 今回は福岡在住の浦川大志さんと上村卓大さんが1期に続いて2期も参加するので、より多くの作家と出会える設計になっているのも面白い点ですね。
中 もっと言うと、彼らが外から来た人と福岡という場所のつなぎ役になってくれたら、もっと面白い何かが生まれるんじゃないかなと思います。

あじびは内向きであってはいけない

中 2期含め、趙さんはこれからのレジデンスにどんな可能性を感じますか?
趙 う～ん、可能性しかないですね!
中 いい言葉!
趙 私としては「数十年後もまた一緒に仕事しようぜ」という気持ちで作家たちと関わっているので、それが実現したらいいですね。ともに成長できたら。
中 レジデンスで来てくれたルー・ヤンも世界に羽ばたいた作家の一人だけど、11月にはあじびでトークイベントを行うなど、継続して深いつながりが持てているのは嬉しいことですよね。
趙 2期は日本以外のアジア圏の作家がいないのも面白い点。アジアってそもそも何なのか、地域で区切ることにどんな意味があるのかについて、考えるきっかけにもなるんじゃないかなと思います。
中 ほかに僕がレジデンスならではだと思っているのは、ザワザワ感なんです。アーティストがいるからこそ生み出される何か起きそうな雰囲気やざわめき。予定調和とは反対の、そうしたザワザワ感が、美術館の新しい可能性をひらいてくれる気がするんです。展覧会で作品を観るのももちろん楽しいけど、やっぱりレジデンスがないとあじびじゃない。
趙 アジア美術の注目度が低かった90年代からいち早くレジデンスを取り入れ、作品を生み出す“ひと”も大切にできたあじびの姿勢こそがレジデンスに現れていると思います。2022年度からACFが拠点となり、心強いコーディネーターチームがついてくれたことで、オープンかつスムーズな運営になったのもいい変化だと思います。
中 さまざまなバックグラウンドをもった人が集まって、いい意味でザワザワ感が増した。やっぱりあじびは内向きであってはいけないんです。つねに福岡や日本の外側とつながっているような場所であってほしいんですよ。



Art Work Shop Report

11月に行われた、レジデンスの作家と福岡の子どもたちによるワークショップ・レポート

ブルーノ・ルイスによる ガリ版でつくる“ガリガリ”

日時:11.5 [火] 10:00～12:00 会場:福岡アジア美術館 交流スタジオ
参加者:小学1～6年生57名



ブルーノ・ルイスさんと名島小学校の子どもたちが、ガリ版づくりのワークショップを行いました。子どもたちはガリ版を刷る時に聞こえる「ガリガリ」という音から思い浮かべるイメージをもとにして、事前に版を制作。この日はその版を実際にブルーノさんと一緒に刷って、作品制作の過程を体験しました。さらに、「ガリガリ」の音のイメージを思い思いに描いた冊子づくりも行い、楽しい時間を過ごしました。

上村卓大による アーティストとつくる秘密基地★

日時:11.7 [木] 9:40～11:00 会場:福岡アジア美術館 交流スタジオ
参加者:小学1～6年生18名



上村卓大さんと田島小学校の子どもたちが、交流スタジオにあるものを用いて秘密基地をつくりました。テーパー、ワイヤ、プラスチックダンボール、ラジカセやサル、洗濯ばさみやクリップなどさまざまなものを組み合わせて、自分だけの空間をしつらえました。そこに自分の分身である人形「すきまちゃん」を置いて、基地は完成。最後はみんなで原状復帰し、スタジオはもとの空間に戻りました。上村さんとの創作体験は子どもたちの心にずっと残ることでしょう。